

カール・メンガーの論理

——『国民経済学原理』から方法論争へ——

徳丸夏歌

I はじめに

1871年『国民経済学原理』*Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*（以下『原理』と略記）を出版したカール・メンガーは、同著をドイツ歴史学派の祖であるロッシャーに捧げ、その序文で次のように述べている。

われわれにとって特別に喜ばしかったのは、本書で取り扱われた、国民経済学のもっとも一般的な諸理論を包摂する領域が、その少なからぬ部分をまさしくドイツ国民経済学の最近の発展に負っていて、したがって本書で試みられた国民経済学の最高諸原理の改革が、ほとんど例外なくドイツ的篤学心のみみ出した予備業績を基礎として行われたということである。（Menger 1871, Vorrede, X / 訳 vi）

後にワルラス、ジェヴォンズらとのいわゆる限界革命を担う近代経済学の源流と見なされることとなり¹⁾、オーストリア学派成立の礎となった同著が、ドイツ歴史学派への敬意の表明と共に始められたことは注目すべき事実である。

しかしながら同著は、メンガーの意図に反し歴史学派からの酷評を受け²⁾、12年後の1883年、メンガーは事実上の歴史学派批判の著『社会科学、とりわけ政治経済学の方法に関する研究

Untersuchungen über die Methode der Sozialwissenschaften, und der politischen Ökonomie insbesondere (Menger 1883 [以下、『研究』と略記]) を出版する。同著でメンガーは、歴史的研究にとっても厳密一般法則を提供する精密理論が不可欠であると主張し、国民経済や各時代の観察と統計から歴史法則を導く歴史学派の方法を批判する。同著は歴史学派の論客シュモラーによって、歴史研究に対するメンガーの無知の結果として、『シュモラー年報』上の論文「国家学および社会科学の方法について *Zur Methodologie der Staats- und Sozialwissenschaften*」(Schmoller [1883] 1987) において激しい論難を受ける。メンガーはこれに対し翌年「ドイツ国民経済における歴史主義の誤謬 *Die Irrthümer des Historismus in Deutschen Nationalökonomie*」(Menger 1884) と題した論文で応戦し、歴史学派へ捧げられた『原理』は、オーストリア学派とドイツ歴史学派のいわゆる方法論争 *Methodenstreit* へと帰結したのであった。

方法論争勃発の契機となり、主観的価値論を基幹とするオーストリア学派独自の経済学を基礎づけた著として学説史の中に位置づけられる『原理』であるが、近年の研究が明らかにするように、1871年の出版時点におけるメンガーは歴史学派に対立するというよりはむしろ、ドイツ歴史経済学の強い影響下にある経済学者であった (Streissler 1990; 1997; 池田 1990; Tribe

1995; Priddat 1997a). シュトライスラーが指摘するように、メンガーは『原理』の中でヘルマン、シェフレ、クニース、ロツシャー、ラウといったドイツの経済学者の著作を多数引用しており、「…メンガーの『原理』を実際に読んだ誰にとっても、メンガーの知的孤立や彼とオーストリア学派のドイツ経済学からの独立という最初の神話が、いかにして起こりえたのかはきわめて不可解である」(Streissler 1990, 33-35).

確かに人間とその需求を満足させる財の分析から出発して、貨幣や交換、市場といった経済現象を説明しようとする1871年『原理』におけるメンガーの基本的な立場は、はじめから市場関係を前提する英仏の経済学と異なり、ドイツ経済学の伝統に連なるものである。またメンガーと歴史学派はいずれも実在論者であり、社会科学の課題は因果的な社会科学法則を導くことにあると考えていた。しかしシュトライスラーのように、メンガーを「ドイツの経済学者」(Streissler 1997)としてのみ理解することは、『原理』出版後にメンガーが歴史学派からの酷評を受けた事実や、歴史学派のシュモラーとの間で繰り広げられた1880年代の方法論争、およびメンガーが歴史学派から離れて独立の学派を形成した史的経緯³⁾を説明しない。

近年の研究がメンガーとドイツ歴史学派との連続性を強調する一方で、従来両者の対立はしばしば、社会科学における「演繹主義と帰納主義の対立」(Cf. Schumpeter 1954, 814; Treibe 1995, 74 / 訳99)といった図式に当てはめて理解されてきた。しかしメンガーは晩年、ロツシャーへの追悼文の中で方法論争を回顧して次のように述べ、これを明確に否定している。

ドイツ歴史経済学者が——科学的著作の中においてさえ——しばしば帰納的方法の代表者であり、オーストリア経済学者を演繹主義的方法のそれとして描かれるのであれば、これは実際の状況に合致していない。…いずれも

実在現象およびその法則の探求にとって不可欠な基礎が経験にあること、…帰納および演繹が密接に関連し、相互に支えあい補完しあう知識の手段であることを認識している。現在にいたるまでかならずしも完全には解消されていない両学派の対立を基礎づけるものこそ、よりはるかに重要なものである——それは国民経済の領域において科学が解決しなければならぬ、研究の対象、および課題の体系についての異なった解釈に関連している。(Menger 1935, 278-79 [強調部分は原文による])

またミルフォードが指摘するように、メンガーはしばしば帰納的推論を用いており (Cf. Milford 1990), 帰納と演繹といった単純化された構図は、方法論争の争点を十全に説明しない。したがってメンガーが指摘する、歴史学派とオーストリア学派の「研究の対象および課題の体系についての異なった解釈」(Menger 1935, ibid.) が、いわゆる帰納—演繹の対立を超えてどこに存するかが問題となろう。

本稿の狙いは、メンガーの『原理』をドイツ歴史学派の論理的改革の著として位置づけ、1871年の執筆時におけるメンガーの歴史学派批判の意図、および方法論争で展開された議論との一貫性を明らかにすることである。本稿によれば、『原理』をロツシャーに捧げたメンガーは、1883年代に『研究』およびシュモラーとの間の論争を通じてはじめて歴史学派への方法論的対立を顕にするが、その基本的な論理改革の意図は既に『原理』の因果律を導く社会科学の論理を基礎づけていた。それは帰納主義に対する演繹主義からの批判ではなく、歴史学派の外延的な論理形式から内包論理への批判的再構成であった。

1871年の『原理』成立から1880年代の方法論争への展開を明らかにするために、ドイツ経済学的な枠組みや概念と『原理』との連続性だ

けでなく、一貫したメンガーの歴史学派批判の意図、および独自の社会科学の論理を読み解く必要がある。

メンガーにおける社会科学の論理を明らかにするために、本稿でははじめに『研究』および方法論争で展開されたメンガーの歴史学派批判の論点を明らかにする(第II節)。本稿の結論は、方法論争におけるメンガーが、(1) 社会科学の課題、(2) 実在論、(3) 経験的基礎、(4) 因果律導出の論理において、歴史学派の外延的な *extensional* 論理に基づく社会科学を批判し、内包的な *intensional* 論理に基づく社会科学の方法論的正当化を試みていたことである。次に本稿では、『研究』で示された歴史学派批判の論理が、既に『原理』におけるメンガーの社会科学法則導出の論理を基礎付けていたことを示し(第III節)⁴⁾、最後に結論を述べる(第IV節)。

II 方法論争におけるメンガーの歴史学派批判

『原理』におけるメンガーの論理的改革を明らかにするために、本稿でははじめに、方法論争および『研究』で展開されたメンガーの歴史学派批判の論点を明らかにする。方法論争はしばしば、シュンペーターに代表されるように理論と歴史のいずれを強調するかの違いであって「エネルギーの浪費」(Schumpeter 1954, 814)であると見なされるか、あるいは前述のように、社会科学における「演繹主義と帰納主義の対立」といった図式的な解釈を招いてきた。しかしながらメンガー自身が後に指摘するように、両者の対立はそのような図式には還元されえない多くの問題を含んでいる(Menger 1935, 278-79)。メンガーと歴史学派における論理形式の相違を明らかにするために、本節でははじめに論理学における外延と内包の区別について簡単に説明する。

論理学において、普通名詞および命題の意味は外延 *extension* (指示集合) と内包 *intension*,

comprehension (意味内容) とに区別される。たとえば“カラス”という名詞の“外延”は、指示可能なカラスの集合であり、“カラス”の“内包”はその名詞が含意する意味内容(例：羽が生えている、黒い…等)である。ある命題の外延は事実的真偽値を与え、ある命題の内包は論理的な真偽値を与える。たとえば命題“すべてのカラスは黒い”の外延が真であるのは、指示可能なカラスの集合がすべて黒いときであり、命題“すべてのカラスは黒い”の内包が真であるのは、“カラス”という語が“黒い”という意味内容を含むときである。

本節ではメンガーの論敵であったシュモラーの方法と比較対照しつつ、方法論争で展開されたメンガーの議論を、歴史学派の外延的論理を批判し、内包論理に基づく社会科学法則導出の論理の批判およびその再構成として、以下の四点に要約されることを提起する⁵⁾。

(1) メンガーの歴史学派批判：社会科学の課題の再構成

社会科学の課題は、社会現象の外延の叙述ではなく、厳密一般性的な法則の提示におかれるべきである。

(2) メンガーの歴史学派批判：実在論の再構成

社会科学が対象とすべき実在は、社会現象の外延の全体(例：国民経済)ではなく、現象の内包的な全体性(メンガーの用語では社会現象の質的側面；例：経済的側面)にあり、その解明のみが社会科学において厳密一般法則をもたらす。

(3) メンガーの歴史学派批判：経験的基礎の再構成

社会科学法則を導く経験的基礎は、外延的な集合の観察とその分類ではなく、社会現象を構成する要素の観察と分析から形成されるべきである。

(4) メンガーの歴史学派批判：因果律導出

の推論の再構成

社会科学における因果律は、外延的な全体性と継起性の観察ではなく、社会現象を構成する要素の観察と要素の内包的な関係性の分析によって導出されるべきである。

以下、詳しく論じることにより、メンガーの主張が明らかになる。

1. メンガーの歴史学派批判：社会科学の課題の再構成

『研究』におけるメンガーの歴史学派批判は基本的に、国民経済の外延的な観察と量的多数性によって導かれる歴史学派の歴史法則が、個別的な経験則にとどまり、社会科学において厳密で一般的な法則をもたらないことであった。『研究』におけるメンガーの意図は、外延的な事実との一致によって正当化される歴史学派の社会科学法則を批判し、個別経験を超越した厳密で一般的な法則を提示する方法を、方法的に正当化することである。

歴史学派のシュモラーによれば国民経済学は、「国民経済的現象を記述し、定義し、原因から説明し、相互連関をもった全体として把握しようとする科学」(Schmoller [1911] 1985, 930 / 訳 15) である。しかし国民経済現象は、因果構成要素の特定が不可能な性質を有しており、「結果は原因のなかに実質的には含まれているが、論理的に含まれておらず、したがって、結果は原因から演繹することはできない」が、「この関連をわれわれは経験によってはじめて確認する」(Schmoller [1911] 1985, 970 / 訳 114)。なぜならシュモラーによれば社会科学は、自然科学のように実験によって原因を他の非本質事象から分別することが不可能であり、かつ「存在するものが複雑に並存するという事実」によって、「探求は原因にたどり着くその前の推測に終わり、これがこれ以上探求できない最終

原因とされてしまう」(Schmoller [1911] 1985, 969 / 訳 113)。したがって「われわれは、いつも必ず連続して結びつくものを原因と結果として扱う」(Schmoller [1911] 1985, 977 / 訳 133) のであり、社会科学法則は事象の外延的な継起性の観察によって導かれる。

シュモラーはこのように現象の外延的な継起性の観察から導かれた社会科学法則の妥当性を、統計による量的多数性によって正当化しようと試みる。シュモラーによれば、「統計的方法」は、社会科学において、「正確性と精密性の感覚をはじめてつくり出し…大量現象を確固たる観察のもとにおき、数字による点数化を使って絶対に確実な特徴づけを行うことをはじめて可能にした」(Schmoller [1911] 1985, 960 / 訳 90) のであり、統計による量的多数性は精密性と同値である。したがってシュモラーの社会科学法則導出に至る推論は、事象の観察 E から出発して経験的基礎を構成し、現象の継起性から法則を帰納 I し、導かれた法則をふたたび統計 E によって一般化し正当化することによって、社会科学法則 T に至る過程である。

$$E \rightarrow I \rightarrow E \rightarrow T$$

メンガーはこのような歴史学派の、現象の外延的な継起性の観察と量的多数性によって正当化される社会科学法則が、個別現象の叙述にとどまり、事実上の経験則にすぎず、社会科学において厳密一般的な法則をもたらないことを問題とする。「現象の世界が厳密に現実主義的に観察されるなら、その法則というのはたんに一定の現象形態に属している現実的現象の継起と共存の、観察によって確認された事実上の規則性を意味しているにすぎない」(Menger 1883, 35 / 訳 44)。

メンガーは、社会科学における研究を経験-現実主義的研究方針による歴史科学と、精密的研究方針による理論科学に区別し、前者は個別

的な認識に、後者は一般的な認識に関わるとする。メンガーによれば「一定の現象が大なり小なりの正確さで繰り返され、事象の変化の中に反復する」のは「経験の教えるところ」であるから、精密の研究方針によって与えられた厳密一般法則（メンガーの用語では「定型と定型的関係」）から個別具体現象を観察することにより、はじめて現象の深い「理解 *Verständnis*」が得られる（Menger 1883, 4-5 / 訳 20）。

メンガーによれば、個別具体現象を観察する際にも、一般性を欠いた認識は「現実世界のより深い理解ができない」のみならず、直接知覚を超えた予見と支配が不可能な、個別経験に留まる。すなわち、「事物のいっさいの人間の予見および間接的には事物のいっさいの恣意的な構成は、われわれがさきに一般的と名づけたあの認識を前提としているのである」（Menger 1883, 5 / 訳 5 [強調部分は原文による] [本稿 43 頁, 表 1 の(a)参照]）。

2. メンガーの歴史学派批判：实在論の再構成

メンガーは歴史学派の方法が個別経験の叙述にとどまり、厳密一般法則を提供しえないのは、社会科学の対象を「国民経済」といった外延的全体に置く、この学派の实在論に起因していると考えていた。メンガーは歴史学派の实在論を批判的し、社会現象の内包的全体性を社会科学の対象として再設置することによって、厳密一般法則を導く实在論的前提を形成しようと試みる。

シュモラーによれば「国民経済」は近代になって成立した「国民国家という偉大な社会体の経済的側面」であり、それが言語、血統、慣習、歴史、法、教会、国家制度などによって統合され、「他の諸国民とよりもはるかに緊密な紐帯によって結び付けられて」おり、「統一の实在的原因」を有している（Schmoller [1911] 1985, 927-30 / 訳 7-11）。したがって、

われわれは国民経済を、国民の経済的・社会的な組織や制度の統一的システムとみなす。またわれわれは、このシステムが諸部分の独立性にもかかわらず、統一的な实在的全体であると考えている。（Schmoller [1911] 1985, 929 / 訳 11）

メンガーはこのような歴史学派の实在論的前提が、自然科学における有機体との類比を社会科学に無批判に導入した、不適切な实在論であることを強調する。メンガーは社会現象を有機体とみる観点を歴史学派と共有しつつも、社会科学が対象とすべき实在は、国民経済といった外延的全体性ではなく、社会現象の内包的な全体性（現象の質的側面）におかれるべきことを強調する。メンガーは『研究』第3編を「社会現象の有機的理解」と題した項目に割り、社会科学において「全体の機能との関係からみての部分の合目的性を示す」（Menger 1883, 139 / 訳 131）「(自然的) 有機体」との類比が可能であることを認めつつ、以下のように叙述する。

社会現象の有機的理解は、どんな場合でも、社会現象の一部だけに、またその本質のある側面についてだけ適当でありうるにすぎないだろう（Menger 1883, 149 / 訳 139）。

メンガーが問題としている「有機的構成」を持った社会現象の全体性の範疇は、地理的・制度的な現象の外延によって決定される集合ではなく、特定の国家や制度を超えて展開され、現象の特定の性質によって統一性が維持されるような内包的全体性である。メンガーは自然科学との類比を用いつつ、国民経済学の対象が経験によって得られる特定の国家や歴史といった外延的な全体性ではなく、社会現象の経済的側面を明らかにすることにあることを主張する。メンガーによれば、化学は「具体的現象の特定群の『現実的概念』をわれわれに教えるものでは

なく、「質的に、ある点では量的にも、非経験的である要因をとりあつかって」おり、「物体をその現象の全体性のままに把握」するのではなく、「物体の本質や法則をその存在の全側面についてではなく、ただ特定の側面についてだけわれわれに意識させるのである」(Menger 1883, 76 / 訳 80)。同様にメンガーによれば国民経済学は社会現象を、

一般的にかつ全体的にわれわれに理解させる課題をもつものではなく、ただ人間生活の特別な、もちろんもっとも重要な、経済的側面の理解だけをわれわれに与えるという課題をもつ理論なのである。(Menger 1883, 78-79 / 訳 82 [強調部分は原文による])

メンガーにとって国民経済学の対象は、内包的全体性(質的側面)としての経済的側面であり、社会科学の精密の研究方針の目的は「…社会的有機体とよばれるあの形象の『統一』の特別な性質を明らかにすること」(Menger 1883, 160 / 訳 147)であった[本稿 43 頁, 表 1 の(b)参照]。

3. メンガーの歴史学派批判：経験的基礎の再構成

メンガーは社会科学が対象とすべき実在を、社会現象の内包的な全体性(現象の経済的側面)におきつつも、このような内包的全体性の認識に到達することは、現象を直接観察したところで不可能であると考えていた。メンガーは外延的全体性の観察から形成される歴史学派の経験的基礎を批判し、現象を構成する要素の観察と分析から社会科学を出発させることによって、厳密一般法則を導く経験的基礎を形成しようと試みる。

前述のようにシュモラーにとって社会科学の対象は国民経済といった外延的な集合現象に見出される。シュモラーは特定の国家や民族、時代といった社会現象の外延的な集合を観察して

社会科学における基本概念を形成し、社会科学法則を導くにあたっての経験的基礎とする。「同一のものあるいは類似のものから、共通の属性あるいは結論が述語となる集団を形成することによって、すべての概念は現象の著しく大きな外的・内的多様性を単純化する」(Schmoller [1911] 1985, 965 / 訳 103)。

メンガーはこのような歴史学派の国民経済や特定の時代、民族といった外延的全体性の直接的な観察と分類によって形成される経験的基礎が、「その本質の全体性とあらゆる錯綜性において」(Menger 1883, 34 / 訳 43 [強調部分は原文による]) あらわれるために、様々な原因が相互作用する社会現象の観察において、多数の阻害要因と不確実性を含み、厳密一般的な社会科学法則を導く根拠となりえないことを問題とする。メンガーにとって社会現象の因果律は、現象を構成する要素の内包的な相互作用によって生じるものであり、それらを無視した外延的全体の観察によっては、社会科学法則の導出は不可能である。

メンガーは次のように述べ、社会科学法則を導く経験的基礎が、現象を構成する要素の観察とその分析にあるべきことを主張する。

理論的研究はすべての現実的なもののもっとも簡単な要素を、すなわち、まさにもっとも簡単であるために現実に定型的と考えられなければならない要素を、部分的にだけ経験的・現実主義的な分析でもって確立しようとする。…このようなやり方で理論的研究は質的に厳密に定型的な現象形態に到達する。(Menger 1883, 41 / 訳 49 [強調部分は原文による])

メンガーの意図は観察を最も単純な要素に向けてことによって、社会現象の内包的な実在を構成する要素(例：人間、財など)を分析し、社会現象の経済的側面に合致した要素の内包(性

質；例：欲望満足に努める；需求を満たす）を同定することである。メンガーは要素の観察と分析によって要素の内包（性質）を同定することにより、社会法則を導く適切な経験的基礎を形成することが可能であると考えていた。

社会科学の対象をその外延的な全体ではなく、現象の質的側面にあるとして、要素の性質を特定するメンガーの方法は、しばしばアリストテレス的な本質主義と結び付けられて解釈されてきた（Kauder 1962; Smith 1990）（Cf. Kauder 1962; Smith 1990）。本質主義の論理的解釈は、ある事物が存在するにあたって不可欠の性質が存在し、その性質によって事物が規定される立場を指す。仮に人間の利己心と欲望満足から経済理論を出発させるメンガーの立場を本質主義として解釈し、論理的に定式化するならば、

$E: x$ が人間であるならば、 x は常に欲望満足に努める。

$E': (\forall x)(Hx) \rightarrow (Rx)$

(\forall : 全称量子 (すべての) \rightarrow : 含意 x, y, \dots : 個体変項, A, B, \dots : 述語定項, $Hx: a$ は人間である, $Rx: x$ は欲望満足に努める 以下同様)

である。

しかしメンガーが全称命題で示される人間命題を出発点としたという意味における本質主義者でなかったことは、次の叙述からも明らかである。

経済学者は、社会生活の構成を、余計な考慮や誤謬、無知に影響されない、人間的私利の自由な作用の観点からその研究の対象としているからといって、人間は事実上ただ利己にだけ左右されるとか、または無過失であり、全知であるとかを主張するものではない。（Menger 1883, 80 / 訳 83）

メンガーは経済現象にとって、利己心が人間の決定的な動因であることを認めつつ、人間行為が「特定の動機だけに左右されるものではない」として、利己心以外の動機に「公共心」、「隣人愛」、「慣習」、「正義」などを挙げる（Menger 1883, 73 / 訳 78）。

メンガーの社会科学法則導出の論理は本質主義ではなく、实在現象としての内包的全体性（ex. 社会現象の経済的側面）を前提とした条件論理とでも呼べるようなものであり、その論理を定式化するならば、

$M1: 人間 x$ について、存在する経済的世界 W に属するならば、 x は常に欲望満足に努める。

$M1': (\forall x)(\exists W)(Hx \wedge x \in W) \rightarrow Rx$

(\exists : 存在量子 (存在する), \in : 要素記号 (\sim の元である), \wedge : 連言 (かつ), W : 集合, \neg : 否定 以下同様)

である。メンガーの論理における人間の欲望満足行為は、経済的实在 W を前提として規定された属性であり、 E' の反証 ($\exists x)(Hx \wedge \neg Rx)$ (“欲望満足に努めない人間が存在する”) は明らかに $M1'$ と矛盾しない。つまりメンガーは、公共的利益を追求する人間行為と、そこから生成される制度の余地を認めつつも、社会現象の経済的側面という内包的（質的）全体性によって人間の利己的行為が決定的であると論じているのである⁶⁾。メンガーにおいて欲望を満足させようとする人間行為類型は、特定の質的側面（国民経済学においては経済的側面）を实在論的前提として定義されており、対象の必然的性質として定義されるいわゆる本質主義とは一線を画する⁷⁾。

メンガーは、歴史学派の外延的な集合の観察によって導かれる経験的基礎を批判し、社会現象を構成する要素を分析し、社会現象の経済的側面に即した要素の内包を特定することによ

て、社会科学法則を導く経験的基礎を構成しようと試みていたのである[本稿 43 頁, 表 1 の(c) 参照].

4. メンガーの歴史学派批判：因果法則導出の論理の再構成

メンガーは歴史学派の外延的な集合現象の直接観察と、その継起性によって帰納的に導かれる社会科学法則が、因果律の論理的な説明をもたらさないことを問題とする。メンガーの意図は、歴史学派の外延的な因果法則導出の論理を批判し、内包的な全体性として因果法則を再設置することによって、厳密一般的な社会科学法則を提示することである。

前述のようにシュモラーは、国民経済や民族、時代といった社会現象の外延的な全体性の観察と分類によって経験的基礎を形成し、このように導かれた経験的基礎の外延的な継起性によって、いわゆる発展段階論などの歴史法則を帰納的に導く (Cf. Schmoller [1884] 1971). 「われわれは、いつも必ず連続して結びつくものを原因と結果として扱う」(Schmoller [1911] 1985, 977 / 訳 133). そして現象の外延的な継起性の観察から導かれた社会科学法則の妥当性は、統計的な量的多数性によって正当化される。

メンガーは、このような歴史学派の外延的な継起性の観察と量的多数性によって正当化される歴史法則が、事実的な経験則に過ぎず、論理的な説明を欠いており、厳密一般的な因果法則をもたらさないことを問題とする (Menger 1883, 35 / 訳 44). メンガーはこのような歴史学派の因果律導出の過程に対し、社会現象を構成する要素間の内包的な全体性を同定することによって、社会科学における因果律の論理的な説明が可能であると考えていた。

前述のようにメンガーは、内包的な实在論を前提しつつ、社会現象を構成する要素の観察と分析によって要素の内包を同定し、社会科学における経験的基礎 (例：欲望満足に努める経済

人；人間の欲望を満足させる財) を形成する。メンガーはこれらの経験的基礎に基づき、さらにこれらの要素間に生じる内包的な関係を観察して分析し、社会現象の内包的实在に合致した関係性を特定することによって、段階的に市場現象などの社会現象の实在的な全体 (メンガーの用語では社会現象の質的側面) が、論理的に明らかにされうると考えていた。

[市場価格、賃金、利子率などの] 現象もまた…経済主体の個人的利益を追求する、無数の勢力の意図されない合成果であって、したがってその理論的理解、その本質とその動きの理論的理解もまた、…それらをその要素に、それらを生む個別要因に還元し、…人間経済の複雑な現象がこうした、その要素から組成される法則を研究することによってはじめて、精密的にこれを獲得することができる。(Menger 1871, 182-83 / 訳 167 [強調部分は原文による])

メンガーの因果律導出の過程は、社会現象を構成する要素に分解し、要素を分析して現象の経済的側面に関連する内包 (性質) を特定し、その要素の内包から生成する内包的な関係性を分析することによって、段階的に現象の経済的側面に到達しようとする。メンガーの主張の構造は次のように定式化されよう。

M2：経済人 x と財 y について、存在する経済的世界 W に属するならば、 x と y との間には常に内包関係 $Q(x, y)$ が成り立つ。

$$M2' : (\forall x, y) (\exists W) (Hx \wedge Gy \wedge x, y \in W) \rightarrow Q(x, y)$$

M2 は前述の命題 M1 (= 在る人 x について、存在する経済的世界 W に属するならば、 x は常に欲望満足に努める) を前提として規定された、人間と財との内包的な関係性である。

表 1

	(a) 社会科学の課題	(b) 社会科学が対象とする实在	(c) 社会科学法則を導く経験的基礎	(d) 因果律を導く推論
歴史学派	外延的事象の叙述	“国民経済”などの（指示可能な）外延の全体性	国民経済、特定時代といった外延の全体の観察と分類	外延的な継起性と量的多数性による歴史法則の帰納
メンガー	厳密一般的な法則の提示	“現象の経済的側面”といった（指示不可能な）内包的全体性	財、人間といった構成要素の観察と分析	構成要素から出発して観察と分析を繰り返し、高次の内包的全体に至る過程

メンガーはこのように、最も単純な要素の観察と分析から出発し、要素間の内包的な関係性を分析し、段階的により複雑な要素の相互作用の説明に至ることによって、内包的全体性としての経済現象（社会現象の経済的側面）に到達可能であると考えていた。メンガーの社会科学法則導出の推論は、最も単純な一項目の要素の観察と分析から出発して、社会現象の経済的側面に合致した要素の内包を定義し M1、次にこのように定義された二項目の要素の分析によって要素間の内包関係を定義し M2、段階的により複雑な n 項目の要素から成る社会現象の内包的な全体性 Mn に至る過程である。

$$M1 \rightarrow M2 \rightarrow \dots \rightarrow Mn$$

メンガーは歴史学派の外延的な継起性の中に認識される歴史学派の因果律に対し、要素間の内包的な関係性として社会科学法則を再設置することにより、社会科学における論理的な、それゆえ厳密一般的な因果律の説明を提供することを企図していたのである [表 1 の (d) 参照]。

III 『原理』におけるメンガー

前節までの議論においてわれわれは、1880年代の『研究』および方法論争において展開されたメンガーの歴史学派批判が、(1) 社会科学

の課題、(2) 实在論、(3) 経験的基礎、(4) 因果律導出の論理の四点における批判とその再構成として特徴付けられ、外延論理から内包論理への論理的転換の正当化として解釈されうることを見た。本節では、1871年のメンガーがその概念枠組みにおいてドイツ経済学の強い影響下にありつつも、方法論争において顕著となったメンガーの論理的転換が、既に1871年『原理』における社会科学法則導出の論理を基礎づけていたことを論じる。

シュトライスラーによれば、『原理』におけるメンガーの主観的価値論は、19世紀のドイツにおける国民経済学の伝統と一貫した議論の中に位置づけられるものである (Cf. Streissler 1990; 1997)。また既に指摘されるように、メンガーは『原理』執筆にあたってロッシャーの『国民経済学体系』(Roscher [1854] 1879 [以下『体系』と略記])を参考にしており (Cf. 池田 1990; 八木 1998)、両著を比較するならばその基本概念の類似性は明らかである。また『原理』の長文の脚注においてメンガーは、「経済財」および「価値」観念のドイツにおける概念の概観を行っており (Menger 1871, 53-55. Fn. / 訳 47-48. Fn.)、メンガーの財論および価値論がドイツ経済学における概念の継承と発展であったことには疑いの余地がない。

しかしながら『体系』におけるロッシャーは、

人間の欲望とそれを満足させる財の分析からその著を出発させる点において『原理』との共通性を維持しつつも、次のように述べる。

国民生活は、すべての生活と同様、互いに最も密接に結びつけられた多様な全体的現象である。それゆえ、その一側面を科学的に理解するためには、必然的にその全側面を知ることが不可欠である。(Roscher [1854] 1879, 32)

一方メンガーは『原理』序文において、人間の欲望が人間行為の唯一の動機でないことを認めつつ、「人間の意思の自由」によって経済法則の厳密一般性に異議を唱える立場に対し、次のように述べる。

人間の意思の自由をもちだすことは、経済的行為が完全に合法的であるとするにたいする異議としては正しいであろうが、人間の経済的行動の結果を制約し、人間の意思から完全に独立した現象の合法性にたいする異議としては、決して正しくない。まさに、後者こそがわれわれの科学の対象である(Menger 1871, IX / 訳 vi)。

メンガーは『体系』におけるロッシェの基本概念を継承しつつも、外延的な国民経済を統一的な実在と見なして社会科学探求の対象とするロッシェに対し、人間の欲望から生成する現象の質的(内包的)側面としての経済現象を提示し、その実在論において明確な対照を描いているのである。これは前述におけるテーゼ M1 と同じ構造であり、ロッシェが国民経済に関連する人間行為の動機として、利己心と公共心のいずれをも認めたこと(Roscher 1843 Kap. 1 § 5)を顧慮するならば、その対照は明らかである。これは1871年の時点では歴史学派への批判形式を採らないもの⁸⁾、『研究』において一貫して引き継がれた、メンガーの内

包的な実在論である[表1の(b)参照]。

メンガーは序文においてこのように述べた後、続く「財の本質について」と題された第1章第1節において財の分析を行う。メンガーによれば、物が財としての性質を獲得するための条件とは、

- (1) 人間の欲望
- (2) ある物をこの欲望の満足との因果的連関のなかにおくことを可能にするようなその物の諸属性
- (3) 人間の側でのこの因果連関の認識
- (4) その物を上記の欲望の満足のために実際に用いることができるようにそれを支配すること(Menger 1871, 3 / 訳 3-4)

である。メンガーの財定義は基本的にロッシェのそれを踏襲したものであるが、第四の条件である支配可能性 *Verfügbarkeit* は、メンガーによって新たに付け加えられたものである⁹⁾。

同条件によってメンガーは、財と経済人という要素の分析と観察によってその内包を特定するだけでなく、構成要素である財と人間との内包関係の分析を提示しているのである。支配可能性概念の導入は、財、人間の叙述から出発しつつも、それらの関係性の分析にまで至らなかったロッシェの歴史的方法(Cf. Roscher [1854] 1879)と明確な対照を描いている。個々の構成要素の分析から出発して、要素間の内包的な関係性の分析から社会科学法則を導くメンガーの方法論的立場は、『研究』において一貫して引き継がれたものであり、前項におけるテーゼ M2 と同様の論理構造である[表1の(c)参照]。

メンガーはこのように、社会現象の経済的側面に合致した財の内包(性質)、人間の内包、財と人間との内包的な関係性を分析し定義した後、経済財をめぐる交換の理論へと議論を展開

する。メンガーは続く「経済と経済財」と題された第2章において、財について、人間の

- (a) 需求が支配可能量より大きい場合、
- (b) 需求がこの数量より小さい場合、
- (c) 需求と支配可能量が一致する場合

が存在するとする (Menger 1871, 51 / 訳 45)。メンガーは人間と財が (b) 需求が支配下可能量より小さい場合を「人間の経済」とよび、このような数量関係にある財を経済財と定義づける (Menger 1871, 53 / 訳 47)。ここでの分析は第一章で論じられた財と人間との内包的な関係性に基づいて展開されている。

すなわち『原理』におけるメンガーの論理は、内包的な全体性としての経済的側面を社会現象の实在として前提しつつ、最も単純な要素の観察から出発して経済的な实在を前提した分析を行い (=M1; 人間と財の分析)、次にその定義に基づく要素間関係の観察と分析を行い (=M2; 人間と財の関係性の分析)、段階的により複雑な社会現象の内包的な实在としての経済的側面 (=Mn) に至ろうと試みていたのである [表1の (d) 参照]。メンガーは『原理』序文において、同著の方法について次のように述べる。

…本著で筆者は、人間経済の複雑な現象をまだなお正確な観察に向けうる単純な要素に還元し、それらの要素をその本質に対応した尺度に当てはめ、この尺度に常に忠実でありつつ、それらの要素からより複雑な経済現象が発展するその仕方を探求するよう努力した。(Menger 1871, VII / 訳 iv)

社会現象の内包的全体性としての経済的側面を实在論的前提とし、この实在論的前提に合致した構成要素の内包的同定と、構成要素間の内包的な関係性の同定から、段階的に社会現象の实在に至ろうとするメンガーの推論過程は、『研

究』におけるメンガーと一貫した社会科学の構想である。

メンガーは後にワルラスに宛てた書簡の中で、自らの方法を分析-総合的 *analytisch-synthetisch* または分析-統合的 *analytisch-compositiv* であるとしている (Walras 1965, 2-6)。これは「現実の忠実な模写」(Roscher 1843, Kap. 1 § 1) および社会現象の「解剖学」(Roscher [1854] 1879, 53) として歴史的方法を提示し、社会現象の全体およびその構成要素の外延的な描写を行うロッシェアの方法と、明確に区別されうるメンガー独自の社会科学の論理である。

メンガーは歴史学派の概念的枠組みを継承しつつも、構成要素間の内包的関係性の分析によって、経済現象の説明へと至る論理を『原理』において示そうと試みていた。『原理』におけるメンガーの意図は、事実的な真理として正当化されるが、存在命題にすぎない歴史学派の外延的な論理を、分析と定義によって内包的な論理へと転換することにより、論理的な、それゆえ厳密一般的な真理値を与えることにあった [表1の (a) 参照]。

メンガーの歴史学派批判は方法論争において顕著となるが、既に1871年の『原理』における社会科学の論理を特徴付けていたのである。

IV 結論

1871年のメンガーは、その概念的な枠組みにおいてドイツ経済学の伝統の中にありつつも、その外延的な社会科学の論理を、厳密一般的な法則をもたらす内包論理として再構成しようと試みていた。メンガーの論理は歴史学派の理解を得ることなく、『原理』の不評は出版後のメンガーを、『原理』の論理を方法論的に正当化しようと試みる『研究』の執筆、そして方法論争へと向かわせることになる。

『原理』におけるメンガーの独自性は、人間、財、国民経済といった個々の社会現象の外延的な叙述を企図する歴史学派に対し、人間の欲望

とそれを満足させる財との内包関係の分析から出発して、段階的に社会現象の内包的な実在の解明に至ろうとする内包論理への転換にあった。これは『原理』から『研究』へ至るメンガーの方法を一貫して基礎付け、メンガーを歴史学派から隔てる社会科学の論理である。

メンガーの意図および論理は歴史学派には決して理解されることはなかったが、方法論争の問題意識を継承したヴェーバーが、歴史学派の批判的継承の著『ロッシェンとクニース』の冒頭において、外延と内包との区別を明確に論じたことは興味深い¹⁰⁾。『原理』におけるメンガーの改革の意図に注目するならば、ドイツ経済学の伝統の中で醸成されつつも、その後の方法論的対立に帰結したメンガーの、一貫した社会科学の論理が見えてこよう。

徳丸夏歌：日本学術振興会特別研究員

注

- 1) 近年では限界革命トリオの同一性よりはむしろ、その異質性を強調する見解が一般的である。Jaffé (1976) を参照せよ。
- 2) 初版『原理』に対する歴史学派の反応については、八木 (1998, 195-201)、方法論争の経緯と受容状況については、Bostaph (1978) を参照せよ。
- 3) オーストリア学派第二世代にあたるヴィーザー、ベーム-バヴェルクの著者は、方法論争におけるメンガーの議論ではなく主に『原理』の影響下で執筆され、『原理』の発展と体系化を企図した内容であった (Cf. Wieser 1884; Böhm-Bawerk 1889)。ハイエクによれば、ヴィーザーはメンガーが経済学の体系化ではなく方法論的議論へ向かったことを、むしろ残念に思っていたようである (Cf. Hayek [1929] 1992)。
- 4) カウダーは、メンガーが 1871 年以前に既に哲学および方法論に深い興味を示していたことを指摘し (Cf. Kauder 1962)、ハチソンが述べるように「…実際のところ、『原理』におけるメンガーの経済理論と概念は彼の哲学的および方法論的構想に深く根ざしており、ある程度そこから生成した」(Hutchison 1981, 193) しかこれらの『原理』の方法論的性格を指摘する研究は、メンガーをアリストテレス本質主義の経済学への適用として理解する傾向が強く、『原理』と方法論争の論理的一貫性を十全に分析したものではない。
- 5) メンガー自身は外延と内包の区別を明示的に用いた訳ではない。しかし 19 世紀の論理学においてこの区別はほぼ常識となっており、同時代の経済学者ジェヴォンズ、ヴィーザーもしくは、外延と内包に関する記述を行っている (Wieser 1884, 8; 32; 1891, § IV) (Jevons 1876, 21; 1877, 26)。また外延と内包をどのように扱うかは、現代論理学において極めて重要な課題となっている。外延と内包の区別については、Carnap (1956)、Allwood et al. (1977) を参照せよ。
- 6) メンガーは貨幣成立の起源が、人間社会の合意にあるとするアリストテレスの貨幣論を「部分的に正しい」としつつも、合意や契約ではなく、「経済主体の個人的利益を追求する無数の努力の意図されざる合成果」として、貨幣や市場価格、交換といった現象が生成されることを論じている (Menger 1883, 173-74 / 訳 161-62)。メンガーはここで、人間の欲望から形成される意図せざる結果としての経済現象と、人間の合意の結果としての制度との間に実在論的区別を置いているのである。
- 7) この意味においてメンガーの実在論は、経済的側面にとどまらない他の次元における内包的関係性を許容する余地を論理的に含んでいたといえる。八木は次のように述べる。「[メンガーの論理にしたがって]『公共心』『遵法心』といった性向を孤立的に取り出せば、政治学や倫理学の理論が生まれるであろう」(八木 1998, 199)。K. ポランニーはメンガーにおける「交換」の概念が、文化人類学的な意味におけるそれを排除しないことを指摘している (Cf. Polanyi 1977)。しかしこのような実在論的多層性が、社会科学において厳密一般法則をもたらそうと試みるメンガーの意図と一致していたかどうかは、別の問題である。

- 8) 無論、歴史学派内部においても、F. リスト、ロッシャー、ヒルデブラント、カール・クニースらの旧歴史学派と、ワーグナー、ブレンターノ、シュモラーらの新歴史学派との間には、大きな違いがある。メンガーはロッシャー、クニースを比較的评价していたようである。しかしながらメンガーが、その歴史学派批判の文脈において、新旧歴史学派における違いを明確に区別していたとは思われない。メンガーは後にロッシャーへの追悼文の中で方法論争を、シュモラーと自身との対立ではなく、ドイツ歴史学派とオーストリア学派との対立として回顧している (Cf. Menger 1935, 278-79).
- 9) 塘 (2006) はメンガーの支配可能性 *Verfügbarkeit* 観念が、『原理』における前半五章 (いわゆるマイクロ分析) と後半三章の、いわゆるハイエクの自生的秩序論を先取りしたマクロ的な議論を繋ぎ、統一的な理解が可能となるものとして、提示している。またブリッタート (1997b) はメンガーが価値を意義 *Bedeutung* として解釈した点において、その先行者に対して批判的であり、支配可能性概念を導入したとしている。
- 10) 『ロッシャーとクニース』においてヴェーバーは、法則科学が「つねにヨリ大きくなってゆく外延 *Umfang* とそれゆえつねにヨリ小さくなってゆく内包 *Inhalt* を有する」(Weber 1904 [1922], 5 / 訳 15) とする。ここでのヴェーバーはおそらく、歴史学派において外延的に認識された実在と、メンガーにおける内包的実在とを統合しうる法則が存在するか、という論理的問題に対峙していたと考えられる。

参考文献

- Allwood, Jens, Lars-Gunnar Andersson, and Östen Dahl. 1977. *Logic in Linguistics*. Cambridge: Cambridge Univ. Press. 公平珠躬・野家啓一訳『日常言語の論理学』産業図書, 1979.
- Böhm-Bawerk, Eugen von. 1889. *Positive Theorie des Kapitals*. Innsbruck: Wagner'schen Universitäts-Buchhandlung.
- Bostaph, Samuel. 1978. The Methodological Debate Between Carl Menger and the German Historicists. *Atlantic Economic Journal* VI: 3, September: 3-16.
- Carnap, Rudolf. 1956. *Meaning and Necessity: The Study in Semantics and Modal Logic*. Chicago: Univ. of Chicago Press. 永井成男他訳『意味と必然性—意味論と様相論理学の研究』紀伊國屋書店, 1974.
- Hayek, Friedrich A. von. [1929] 1992. Friedrich von Wieser (1851-1926). In *The Fortunes of Liberalism: Essays on Austrian Economics and the Ideal of Freedom (Collected Works of F. A. Hayek, vol. 4)*, edited by Peter G. Klein. Chicago: Univ. of Chicago Press: 108-25.
- Hutchison, Terence Wilmot. 1981. *Politics and Philosophy of Economics: Marxians, Keynesians and Austrians*. Oxford: Basil Blackwell.
- Jaffé, William. 1976. Menger, Jevons and Walras Dehomogenized. In *Economic Inquiry* XIV (4), December: 511-24.
- Jevons, William Stanley. 1874. *The Principles of Science: A Treatise on Logic and Scientific Method*. London: Macmillan.
- . 1876. *Logic*. London and New York: Macmillan.
- . 1877. *The Principles of Science: A Treatise on Logic and Scientific Method*. 2nd ed. London: Macmillan.
- Kauder, Emil. 1962. Aus Mengers nachgelassenen Papieren. *Weltwirtschaftliches Archiv* 89.
- Menger, Carl. 1871. *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*. Wien: Wilhelm Braumüller. 安井琢磨・八木紀一郎訳『国民経済学原理』日本経済評論社, 1999.
- . 1883. *Untersuchungen über die Methode der Sozialwissenschaften, und der politischen Ökonomie insbesondere*. Leipzig: Verlag von Duncker & Humblot. 福井孝治・吉田昇三訳, 吉田昇三改訳『経済学の方法』日本経済評論社, 1988.
- . 1884. *Die Irrthümer des Historismus in Deutschen Nationalökonomie*. Wien: Alfred Hölder.
- . 1935. *The Collected Works of Carl Menger, vol. III, Kleinere Schriften zur Methode und Geschichte der Volkswirtschaftslehre*. London: The London School of Economics and Political Science.
- Milford, Karl. 1990. Menger's Methodology. In *Carl Menger and his Legacy in Economics Annual Supplement to Volume 22, History of Political Economy*, edited by Bruce J. Caldwell. Durham and London: Duke Univ. Press: 215-40.
- Polanyi, Karl. 1977. *The Livelihood of Man*, edited by H.

- W. Pearson. New York: Academic Press.
- Priddat, Birger P. 1997 a. Der „Gattungswert“ oder die Moral der subjektiven Wertlehre in der deutschen Nationalökonomie. K. H. Rau, F. B. W. von Hermann, B. Hilderbrand, G. W. F. Hegel und A. Wagner, in *Wert, Meinung, Bedeutung: Die Tradition der subjektiven Wertlehre in der deutschen Nationalökonomie vor Menger*, heraus. von Birger P. Priddat. Marburg: Metropolis-Verlag: 241–86.
- . 1997 b. Wert und Bedeutung: Bruch und Kontinuität von Carl Mengers Werttheorie im Verhältnis zu seinen Vorgängern, in *ibid.*: 287–302.
- Roscher, Wilhelm Georg Friedrich. [1854] 1879. *Die Grundlagen der Nationalökonomie. Ein Hand- und Lesebuch für Geschäftsmänner und Studierende (System der Volkswirtschaft. Bd. 1.)*, Stuttgart: J. G. Cotta.
- . 1843. *Grundriss zur Vorlesungen über die Staatswirtschaft nach geschichtlicher Methode*. Göttingen: Druck und Verlag der Dieterichschen Buchhandlung. 山田雄三訳『歴史的方法による国家経済学講義要綱』岩波書店, 1938.
- Schmoller, Gustav von. [1883] 1987. Menger und Dilthey, Zur Methodologie der Staats- und Sozialwissenschaften. In *Gustav Schmoller: Kleine Schriften zur Wirtschaftsgeschichte, Wirtschaftstheorie und Wirtschaftspolitik*, hrsg. von Wolfram Fiedler und Rolf Karl, Teil 6. DDR: Zentralantiquariat der DDR. 福井・吉田前掲書所収(抄訳).
- . [1884] 1971. Das Merkantilssystem in seiner historischen Bedeutung: städtischen territoriale und staatliche Wirtschaftspolitik: in *Studien über die wirtschaftliche Politik Friedrichs des Grossen und Preussens überhaupt von 1680–1786*, in *ibid.* 正木一夫訳『重商主義とその歴史的意義』未来社, 1971.
- . [1911] 1985. *Volkswirtschaft, Volkswirtschaftslehre und -methode*. In *ibid.*, Teil 1. 田村信一訳『国民経済, 国民経済学および方法』日本経済評論社, 2002.
- Schumpeter, Joseph Alois. 1954. *History of Economic Analysis*, edited from Manuscript by Elizabeth Booddy Schumpeter. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Smith, Barry. 1990. Aristotle, Menger, Mises: An Essay in the Metaphysics of Economics. *History of Political Economy*, Annual Supplement to vol. 22:263–88.
- Streissler, Erich W. 1990. The Influence of German Economics on the work of Menger and Marshall. In *Carl Menger and His Legacy in Economics*, edited by Bruce J. Caldwell, Durham and London: Duke Univ. Press.
- . 1997. Carl Menger: der deutsche Nationalökonomie. In *Wert, Meinung, Bedeutung: Die Tradition der subjektiven Wertlehre in der deutschen Nationalökonomie vor Menger*, heraus. von Birger P. Priddat. Marburg: Metropolis-Verlag: 33–88.
- Tribe, Keith. 1995. *Strategies of Economic Order: German Economic Discourse, 1750–1950*, Cambridge and New York: Cambridge Univ. Press. 小林純, 手塚真, 栢田大知彦訳『経済秩序のストラテジー—ドイツ経済思想史 1750–1950』ミネルヴァ書房, 1998.
- Walras, Léon. 1965. *Correspondence of Léon Walras and Related Papers*, vol. 2, edited by William Jaffé. Amsterdam: North-Holland.
- Weber, Max. [1904] 1922. Roscher und Knies und die logischen Probleme der historischen Nationalökonomie. In *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre von Max Weber*, 1. Aufl. Tübingen: J. C. B. Mohr. 松井秀親訳『ロッシヤーとクニース』未来社, 1988.
- Wieser, Friedrich von. 1884. *Über den Ursprung und die Hauptgesetze des wirtschaftlichen Werthes*. Wien: Alfred Hölder.
- . 1891. The Austrian School and the Theory of Value. *The Economic Journal* 1:108–21.
- 池田幸弘. 1990. 「メンガー『国民経済学原理』の学史的位付けについて—ロッシヤーとの関係を中心に」三田学会雑誌, 82, 特別号: 254–69.
- 塘 茂樹. 2006. 「メンガー『国民経済学原理』の統一的解釈について」京都産業大学論集: 社会科学系列第 23 号: 73–97.
- 八木紀一郎. 1998. 「カール・メンガーと歴史学派—方法論争とその後」住谷一彦・八木紀一郎編『歴史学派の世界』日本経済評論社: 191–220.

Carl Menger's Logic: From *Grundsätze* to *Methodenstreit*

Natsuka Tokumaru

Some recent studies discuss that Menger's *Grundsätze*, published in 1871, followed the approach of German historical economists from the nineteenth century. Nevertheless, regarding Menger's *Grundsätze* merely as a work of German tradition does not explain the fact that Menger and German economists were involved in the *Methodenstreit* in the 1880s. In this paper, I propose that Menger's *Grundsätze* can be interpreted as a logical reformation of the method advocated by the German historical school, and that his epistemological discussions in *Methodenstreit* can be regarded as justifications of his logic in the theoretical social sciences. This paper suggests that Menger attempted to reform the extensional logic of German economics to

intensional logic. He justified his logic in four ways: (1) the aim of the social sciences should not be to provide empirical laws that are justified by statistics, but to provide strict universal laws; (2) the reality of social sciences should not be regarded as extensional uniformities such as nations, but as intensional entities such as economies; (3) social laws should not be based on extensional observations, but on observations and analyses of social elements; and (4) causalities in the social sciences should not be explained by the extensional succession of facts, but by analysing intensional relationships between social elements.

JEL classification numbers: B 19, B 31, B 41.